

妊娠中の母親のアルコール摂取と早産リスクとの関連

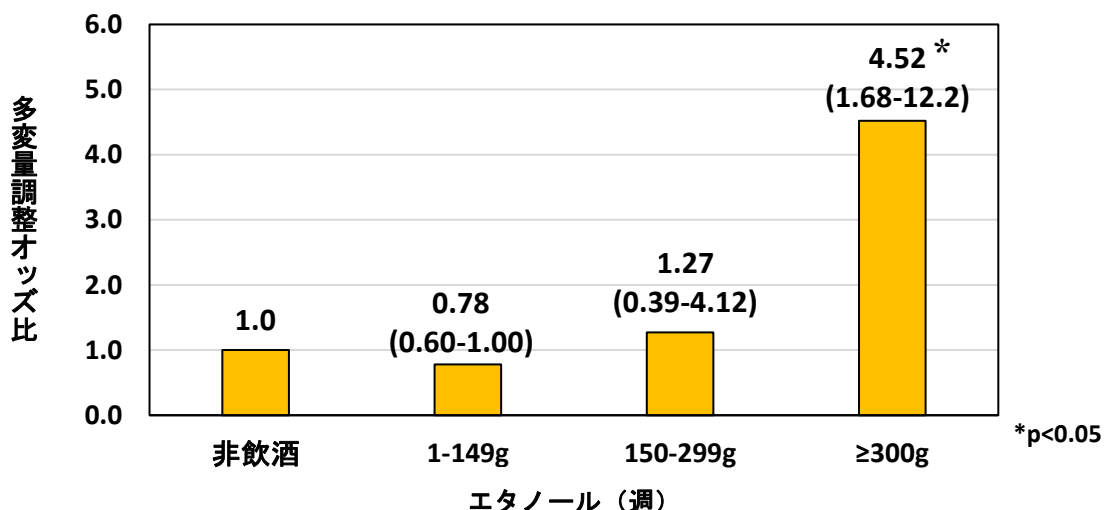
池原賢代

妊娠中のアルコール摂取量と早産リスクには正の関連を認めたという報告や、少量～中等量のアルコール摂取では早産リスクとの関連が見られなかったという報告がなされており、一貫した結果が得られていません。また、日本人を対象として異なる妊娠ステージでのアルコール摂取量と早産リスクとの関連に関する研究はなされていませんでした。今回、エコチル調査で登録した妊娠約9万4千件を対象に妊娠ステージ別のアルコール摂取量と早産リスクとの関連について分析し、その結果を専門誌に発表しました (BJOG. 2019;126:1448-1454)。

妊娠中後期の多量アルコール摂取で早産リスクが増加

自己申告に基づいて算出したアルコール摂取量 (エタノール摂取量に換算) は、非飲酒、1-149g/週、150-299g/週、300g 以上/週に区分し、非飲酒を基準として、それぞれのカテゴリーの早産 (37 週未満の出産) オッズ比を算出しました。妊婦の年齢、登録時の居住地、非妊娠時の Body Mass Index、教育歴、妊娠中の身体活動量、妊娠中期の喫煙、妊娠中の受動喫煙の頻度、妊娠歴、妊娠中の食事からの葉酸摂取量を調整変数として検討しました。

その結果、妊娠中後期の 300g 以上/週の群で早産のオッズ比が 4.52 (95%信頼区間: 1.68-12.2) と高いことが示されました (図 1)。また、1-149g/週ではリスクの低下傾向が見られ、アルコール摂取量と早産リスクとの関連は J 字型となりました。妊娠初期のアルコール摂取量と早産リスクには関連は見られませんでした。



早産 (件)	3805	63	3	5
対象妊娠 (件)	90893	1814	47	26

図 1. 妊娠中後期のアルコール摂取量と早産リスクとの関連

この研究の意義と解釈について注意点

本研究の結果から、日本人の妊婦においても飲酒量が多いと早産リスクが高くなることがわかりました。妊娠中のアルコール摂取は子宮の収縮を促進するプロスタグランジンの分泌増加によって早産を誘発することや、プロスタグランジンは細胞分裂の抑制に関与するサイクリック AMP 活性を上昇させるという報告があります。また、過度のアルコール摂取は重度の血管内凝固や胎盤の血流を減少させるといった動物実験からの報告もあります。また、エコチル調査の別の研究により、妊娠中後期のアルコール摂取（エタノール換算で 150g 以上/週）で早産のリスク因子の一つである妊娠高血圧症候群のリスクが増加することも報告されています。（Iwama N, et al. Hypertens Res 2019;42:85-94）

今回、軽度のアルコール摂取ではリスクが低い傾向がありましたが、この結果について生物学的な説明に関する明らかなエビデンスは得られていません。先行研究で推察されるように、健康に気を付けていたり、早産リスクに関わる疾患が少ない健康な飲酒者が軽度のアルコール摂取群に多かったために早産リスクが低くめになった可能性があります。これまでの研究で、妊娠中は軽度のアルコール摂取であっても、胎児性アルコール症候群や様々な合併症への罹患、発達に対して悪影響があることがわかっていますので、妊娠週数に関わらず妊娠中の飲酒は避けるべきです。